

# 県立学校で集団献血が復活!?

## ～学校現場に“医療行為”が入ってくる!?!～



近年、若者の献血離れに伴う将来的な献血不足が危惧されていることから、過去には高校内で集団献血が行われていました。その後、様々な問題が県内外で発生し、組合の働きかけもあり学校における集団献血は行われなくなった経緯があります。

ところが、最近になって献血啓発活動が活発になり、2023年度は、県内私立高校5校、県立高校3校において、文化祭等で集団献血が行われるなど、復活の動きが生じています。

学校での集団献血はどのように行われていたの?



かつて県下の高校において、次のような集団献血が行われていました。

- ① 日本赤十字大分県支部から集団献血の依頼が各学校にあり、日程を決定
- ② 教員が献血実施の呼びかけ、希望調査を取り、問診票と保護者同意書を配付回収、養護教諭が取りまとめる
- ③ 当日、献血車が校内に入り、血液センター職員が校内の一室で問診検査の準備
- ④ 希望生徒は、授業の途中で抜ける(希望者多数の時は、授業中断)
- ⑤ 事前の問診票確認と健康チェックを行い、献血の可否の振り分けを行う
- ⑥ 献血不可の生徒は、採血結果を聞き授業へ。献血可の生徒は献血車へ  
 ※献血後、気分不良となって保健室で休養する生徒も生じた  
 ※献血終了後、センター職員は片づけして、体調不良生徒の顔を見て「すぐ、よくなるから」と声かけのみして、帰ったことがある

学校での集団献血は、何が問題?



**私たちは、献血そのものを否定しているのではありません。献血の重要性や必要性を理解して、とても大切だと考えています。ただ献血活動のメリットやボランティア精神ばかりを強調して、学校という集団を使って行うことに問題があると考えます。学校は教育の場であり、子ども達が学習活動を行うところです。**

### ★問題点としては以下の通り★

- ① 希望者であったとしても「何であなたはしないの?」「さあ、みんなするよ」等といった同調圧力が働く。
- ② 16～18歳は成長期であり、安全性の確保ができない。(赤血球の回復には2、3週間かかる～日赤 HP より～)。また、危機管理上、学校は日赤に全てお任せというわけにはいかない。
- ③ 問診票の内容や血液検査など、プライバシーや人権に関わることから、保護者の確認(同意)は確実か? \*教育現場では踏み込まないような質問内容が含まれる。
- ④ 問診の結果、献血が不可とされた生徒のフォローは?

それに対してどう取り組むべきなの?



献血は社会的事業であり、医療行為です。私たちは、**献血をはじめ、予防接種、フッ化物洗口などの「医療」が学校に安易に導入されていないか、学校が市場化されていないか、集団である学校で行うことを問題視し、毎年専門部交渉でも声を上げています。**

また、学校は**献血の機会を与える場ではありません**。子ども達の人権を大切にしながら自ら心身の健康について考え、必要な情報を選択し、その結果生徒自身が、献血の意義や自他の命を守ることの必要性を考え行動できるようになることが大切です。ここ数年は、県や大分県赤十字社による啓発活動として出前講座「献血セミナー」の実施や生徒向け冊子の配付が活発に進められていました。その延長で集団献血を行う学校が増えてきています。再び動き出した学校での集団献血活動の実態を把握し、**学校現場での集団献血が広がらないよう、働きかけていく必要があります。**